

グループ住宅の特徴とその評価

ゲートボルグにおけるケーススタディの場合

兵庫教育大学 菊澤康子

目的 後期高齢者人口の増加と共に、増加傾向にある痴呆症高齢者への対策として、現在スウェーデンにおいて実施され、高齢者向け重点施策の1つとなっているグループ住宅について 1. 痴呆症状の改善。2. 家庭的な生活環境。3. ホームサービスワーカーのケアサービスのしやすさ。4. 共同空間の利用のしやすさ。5. サニタリーの利用のしやすさ。6. 他居住者とのインテグレーション等の視点から評価することを試みた。

方法 スウェーデン南西部のゲートボルグコミュニティを中心とする地域において、形態の異なる10か所のグループ住宅を選び、スウェーデン人とノルウェー人の研究者と共同で、対象とするグループ住宅を訪問し、そこでの居住高齢者の生活を観察すると共に、ホームサービスワーカーへのインタビュー調査を実施した。調査は1992年5月から8月にかけて行なった。

結果 対象住宅は、その単独型のものと複合型のものがあり、後者は一般世帯向け住宅か高齢者福祉施設との複合である。それらの建物形態と家庭的な生活環境とは直接的な関係はみられない。各グループ住宅共通の結果としては、痴呆症が入居後改善されている点があげられる。家庭的な生活の有無については、対象としたグループ住宅間で差が認められた。差を生み出す要因としてはそこで働くホームサービスワーカー集団の人間環境と生活運営の方法の影響が強いことが認められた。